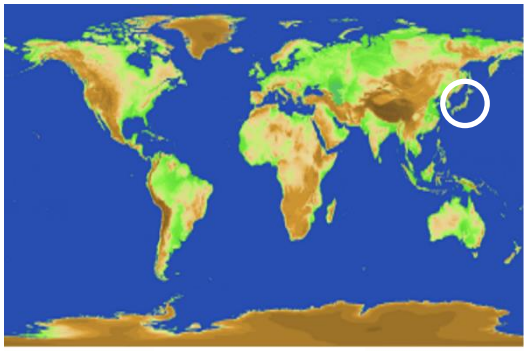
菊川市立横地小学校　学校だより　　令和６年９月号

本気でチャレンジ　みんなで笑顔

『世界基準の地図から見える日本』

【図１】日本の世界地図

【図２】LA で見た世界地図



1990 年８月イラクがクウェートに侵攻したことで湾岸戦争が勃発し、日本のニュースでも連日報道されました。当時の日本は、国連加盟各国が支援をするなか、日本国の決断の遅さ、消極的な外交の対応ぶりに米国議会をはじめ世界から批判を浴びました。旅行会社も日本人の渡米を躊躇する事態でしたが、学生最後の１ヶ月をロサンゼルスでホームステイしました。

ホストファーザー(Roy)は、沖縄県の普天間基地にも駐在経験がある米軍職員でした。

米国では、戦場からの帰還兵と家族が再会する感動のシーンが毎日のようにテレビで流れていました。私は、Roy に「アメリカ人は、日本をどう思っている？」と、片言の英語で聞いてみると、物静かな Roy が笑いながら、【図２】の世界地図をリビングに広げ、優しい英語で私にこう言いました。

「USA is very big country.　Japan is very small island.　（米国は大国だけど、日本は小さな国だよ。）

I don't think there are many people in Japan.　（我々は、日本にたくさんの人がいるとは、思っていないよ。）

Don't worry.　No problem.　Enjoy every day.」（心配するな。大丈夫だ。毎日を楽しめ！）　(^▽^)／

リビングに広げられた大きな世界地図【図２】は、日本が片隅に表記され、地形も曖昧なものでした。世界基準の地図に 22 歳の私は大きなショックを受けました。

日本で教育を受け、日本での報道や日本の価値観で育った私は、まるで日本が世界を支えているかのような錯覚に陥っていました。それは、まさに井の中の蛙であり、恥ずかしささえ感じました。

私を家族のように受け入れてくれたホストファミリーは、日本では経験できない貴重な体験をさせてくれました。平和を願う黄色のリボンを街中の街路樹に飾ったり、地域在住の帰還兵を空港まで迎えに行ったりしました。何千人の群衆の中で、ホストファイミリーと一緒に「USA、USA…」と星条旗を振りながら見た帰還兵とその家族が、感動の再会をする姿には涙が止まりませんでした。平和の尊さ、家族・地域の絆、愛国の精神を肌で実感しました。

パリ五輪を含め世界で活躍している日本人から多くの感動と勇気をいただいています。これからの時代を生きる横地の子どもたちには、郷土を愛し、心や言葉で国境の壁をつくらない世界基準で活躍する人になって欲しいと願っています。　（文責：相田）